

東京学芸大学連続講演会 第13回

「地域誌とまちづくり」

森 まゆみ 氏

作家

東京国際大学

国際関係学部教授



よろしくお願ひします。森まゆみです。東京の東の端の方に住んでいて中央線に縁がないんですけど、かつて学芸大の小川潔さんたちと一緒に不忍池に地下駐車場を作らせないという反対運動をやっていました。水問題のネットワークには支援といますか、ご協力・励ましをいただきまして、その時はよく野川ですとか神田川の上流である井の頭の池とかに来る機会もあったのですが、今日は久しぶりにこちらの方に参りまして、緑がうちの方と比べて多いなと羨ましく思っております。

今日は小川さんと長年同じところに住んでいるというだけではなくて、一緒に活動もさせていただいておりますので、呼んでいただいて大変光栄に思っております。お時間ちょっとですのでどこまで話せるかわかりませんが、やってきたことをできるだけお伝えしたいと思ひます。

私の生まれ育った地

私は1954年に東京都文京区千駄木駒込動坂町322番地というところに生まれました。最近思うになぜ私がそこで生まれたかという、母が3月10日の東京大空襲で焼け出されて、父が5月25日の芝の山の手の空襲で焼け出されまして、焼け出された人たちが戦後、所帯を持つとしたら焼け残った町しかなかったんだということが最近しみじみわかりました。ですから私が生まれた家というのは、両親とも焼け出されて財産とか何もなくなってしまったので、借地でした。長屋でした。二軒長屋の片方で15坪くらいの所で、その家は、大正の震災前に建てた家だったんですね、自分の家は暗くて狭くて汚くて、夜中になるとネズミが運動会をやるような家で育ちました。もはや戦後ではないと言われた頃に生まれ、もっと近代的できれいな家に住みたいというのが夢でした。

それで1964年の東京オリンピックのときに、東京は本当に変わったと10歳の子ども心に覚えてますけれど

も、よその町はどんどんピカピカときれいになって、道が広がってビルになって高速道路が通って新幹線が走ってカラーテレビになったのに、うちの町だけ変わらないままに冴えないんですね。近代化に取り残されておりました、本当に悔しかったのを覚えてます。

それでまた、10年ちょっと経ってですね、会社に勤めていたのを辞めて、結婚して自分の町に戻って来たのですけれど、あいかわらず自分の町は冴えない古くさいとこだなという感じがしました。中学高校位のときは刺激が欲しくて展覧会に行ったり、音楽会に行ったり、芝居を見に行ったりというようなことで、盛り場で遊んだり、まあうちの子たちもみんなそんなことをしてますけど、あんまり自分の町をじっくり見るという機会はなかったのです。

けれど、子どもが産まれたことにより、乳母車を押すとか、よちよち歩きの子どもと一緒に歩いてみると、自分の町を今度はすごく新鮮に感じました。一度銀座に勤め、赤坂のビルで働いた者が、疲れ果てて自分の町に戻って来たときに、自分を受け入れてくれる癒しというか包容力が私たちの町にあったと思うんです。

それでぶらぶら歩いているうちにそれまでたまたま出版の仕事をしていましたのでこういうものは何か記録しなくてはいけないんじゃないかという風に思ひ込んだ。暇でしたので、子どもを連れながら地域の歴史を調べて歩きました。

最初、図書館に行ったんですけども、地域の歴史を書いたものは全くない。東京のというか全国の小さな町についての記録、本というのはないと思うんです。文京区史とかその前の本郷区史というものはあったんですが、それは全く具体的なことは書いてないんですね。何年に予算が付いて道が広がったとか、坂が削られたとか、水道が通ったとか、何代目の議長さんが誰だとか、議員にはこんな人がいたとかいうことは書いてあるのですが、それは公の歴史であって、私たちのような普通の人間がどのようにこの町で生きて、喜んで、悲しんだかということとは全く得られなかった。

しかたがないので前から住む年配の方にとりあえずアタックしまして、「私はこの辺りの地域の歴史を調べたいんですけども、何かご存知のことありませんか」という風に聞いたんですね。親切に家に上げてくれてお話ししてくれる方もあったし、「私、歳は食ってるけど去年きたばかりなのよ。」と言う場合もありました。「私は知らないけど隣の高橋さんのおばあちゃんは家付き娘で80年ここにいるから行ってみたら」と紹介してくれた。そういうのを芽づる式に聞いて、『谷中スケッチ

ブック』という本を書きました。これはまだちくま文庫で版を重ねておりますから、20年以上は生きています本となりました。

地域誌『谷中根津千駄木』創刊へ

これは3ヶ月位で1人で書いた本で、私はそれを書きながら、こんなこと1人でやってもしょうがないんじゃないかと思ったんですね。というのも、すごい格子戸がきれいで、梁が太くて、瓦屋根があって、何十年も建っているようなお家が、そのことを書こうと思って写真撮っておいて、次に行くと壊されている。壊された後は大体駐車場になるとか新建材のアパートになるんですが、何かそれはとても無残な感じがした。家というのも80年90年経つと人格みたいなものができてきて、生き物が殺されてるみたいな感じがしたんですね。

たまたまその頃わかったことは、谷中も、谷中は私の生まれ育った千駄木の隣町でここは行政区でいうと台東区になるんですけど、根津も千駄木も調べてみると、関東大震災でも被害がなく、戦災でも焼け残った所が多い。東京の町でも江戸時代からすでに歴史があって町となっているところで、なおかつ近代以降の大きな災厄である関東大震災と空襲というもの両方逃れた町というのはほとんどないといっている。佃島とか京島とか一部ありますけれども、私たちの地域というのは江戸の初期、寛永寺創建のときから町が存在していた。後で調べたらいんちきで結構焼けていたんですけども。

で、建物が残っているということは建物だけではなくて、そこにお位牌とか文書とか絵草子とか、そういうものにまつわる家の物語が残っていて、それからまた住民の変動も少なく、コミュニティがあって、そういうところがかけがえのない、よそにはないような特徴を持っている場所がある。それがどんどん壊されるのを黙って見ていていいのか。まだ若かったものでものから、たやすく思ひまして、それは私1人で本を書いても終わることではないので、活動にシなくては駄目だなって思い始めちゃった。

そのころ、一番上の子が2歳で保育園に行っていて、同じ保育園に山崎範子という母親友達がいました。彼女に根津はこういうところで谷中はこういうお寺が近くにあるとか、根津は6代将軍家宣の屋敷跡だったんだけど、将軍になって天下普請であそこに大きな神社を建てたんだとか、千駄木は雑木林を開いて、明治になると森鷗外とか夏目漱石とか宮本百合子とか高村

光太郎とか色んな人が住んでいたとか、そんな話をした時に山崎も面白がってくれて何か一緒にやろうと言った。

たまたまその山崎もA5版の「イット」という老いを考えるというミニコミ誌を手伝ってやっていて、私もともと単行本の編集者でしたので、何かをやろうという時、そういう自分たちのかつての生業から出版を思いついたんですね。

それで2人で雑誌を作ろうということになって、もう1人仲間に私の妹ですが、山崎のマンションの1階に赤ん坊を産んだばかりの仰木というのがいた。山崎のうちは家で旦那さんが仕事をしてるし、私の家もちょっとごちゃごちゃしていた。そこで仰木の家を事務所代わりに使わせてもらって、旦那さんが会社へ行った後、そこを事務所にして雑誌を作ろうということになりました。

とにかくお金もないので3人で5万円ずつへそくりを出し合って、まだパソコンはおろかワープロも出始めたような頃だったので、ワープロが打てるという友達にさっき言った様なこと、「私たちの住む谷中・根津・千駄木は関東大震災も戦災も逃れて、古いお寺や古いお家のある由緒ある老舗とか職人さんの手の技、谷中墓地の3000坪の自然と、お寺・仏教という精神的なよりどころもたくさん残っています。そういうものを次代に伝える手がかりとして、あるいはむやみに壊されてしまわないように地域雑誌を始めます。」それから、「ひ弱な、力のない若い母親たちがやることですので、ぜひ応援してください」というようなことを書いてもらいました。

やっぱりタウン誌といいますが、みなさんご存知のようにレジの脇に置いてあってタダでもらえるというイメージが強いので、私たちがタダで配ることを考えたんですね。全部のお店を回って、雑誌を配ってくれるお店を探したんですけど、これは全く一軒も話に乗ってくれなかった。よく言われたのが「何の新興宗教なの」という話で、今頃、サンダル履きで子ども連れでなんか頼みに来るのは新興宗教の勧誘でしょ、というわけですね。あと、「あなたいつ区議に出るの」ということもよく言われて、政治的な野心があるのでこういう活動をしているんだろうと。

結論を言ってしまうと10年経っても何の勧誘にもこないし、区議にも出なくて、相変わらず子ども連れで雑誌配達しているだけなので、その頃になってやっとこの人たちはやっぱり町が好きで文化を残したくてやっているだけなんだということがわかってもら

えた。

最初はそんなわけで全然駄目でした。タウン誌を配るのは盛り場でないと無理ですね。要するに渋谷とか新宿とか銀座とか不特定多数の人が来て、どの店に入ったらいいかわからない。そこで銀座百点とか上野のれん会とかの雑誌を見ると、ここは昔から続いている老舗で安心だとか、おいしいとか、信用できるというのがわかる。そういう雑誌はステイタス作りに使われる。大体そういうところは大きい老舗でけっこういい値段もとる。コース料理8,000円とかあったら雑誌をつけてあげられるし、高いバックを買った人だったらつけてあげられるんですけど、私たちの町はそういった観光地では全くないですね。そうするとお豆腐一丁100円とかおそば一玉60円とかを買ったお客さんに、お金のかかったタウン誌をつけてくれとはとても言えませんね。それからあと水を使う店は絶対ヤダといえますね。お豆腐切った手で紙のタウン誌を売るのはヤダとか。お風呂屋さんとかお花屋さんとか水物の店は全部断られました。そもそもうちの地域はお米屋さんはこの魚屋さんで買い、魚さんはこのお肉屋さんで買っていくぐるぐる回りの経済でなりたっていますので、お店のことは全然知らせる必要はないので宣伝を出す必要もないというのが大方の意見でした。

そこで私たちは作戦を変えました。タダで配ってもらうタウン誌はできない。ならば読者に身銭を切ってもらっても買うような、内容のある、とっておきなきゃならないような地域雑誌を作ろうということになったわけです。

どうやったらお金を出して雑誌なるものを買ってくれるか。タダでもらえるような雑誌とかフリーペーパーとかチラシとかレシビとかいっぱいある中で、町の特に主婦といわれる人たちに大根1本よりも高いものを買ってもらうにはどうしたらいいか。コンパクトで取っつきやすい、資料性があるって保存しないといけない、きれいで取っつきたくなるもの、保存版にするため毎回特集号にする、とかいろいろ考えていました。

1984年に私が29歳のときですが、雑誌を作るとしても全く理解していただけないから、まずはイベントで町にデビューしなくてはならないということで、たまたま三崎坂という坂にある大圓寺というお寺の和尚さんが境内を貸してもいいよとってくださいました。そこで、秋10月15日に菊祭りというのを町会と商店街と仏教会の三者と一緒にやることになりました。

ですが古い町というのはなかなか難しく、どこでもそうですが何か新しいことをやろうとすると「出る

釘は打たれる」という日本によくあるかたちになる。そしてまさに長老支配、町会長さんが大体80歳位でして、町会に階層もある。女、特に若い女なんていうとそれだけで何も聞いてもらえないというような状況でした。でもそういうときにかばってくれる方もあって、「この人たちはアイデア集団としてこの祭りに参加してもらいます」といってくれた方もあったり、「これまで私もさんざんやって足引っ張られて失敗したから、あなたたちだけは失敗させたくない」といってくれた方もいたし、おかみさんで「私は身動き取れないで店番してるしかないけど、私が本当はやりたいことをあなたたちが代わってやってくれるんだから10部でも20部でも買ってあげる」という方とか色んな方がありました。

そういうわけで菊祭りのときにたった8ページの谷根千、これは菊を安く仕入れて安く売るといだけのアイデアだったんですけれども、それだけじゃつまらない。もっと谷中の文化というものをあらわすお祭りにしようというアイデアを出しました。そこは、笠森お仙という明和の頃の江戸の美女のことを永井荷風という作家が書いた碑があるんですね。いかにその笠森お仙が美しかったかというね。江戸の美少女、茶店でその姿を見るために江戸中から人が集まって、芝居になったり手ぬぐいに染まったりしたのが、ある時、好きな人ができてさっさと引退して見えなくなっちゃったという人なんです。この笠森お仙を歌った手まり歌があるというのでそれを聞き込んで、小学校や幼稚園の子達と練習したりしました。また、反対側の団子坂という千駄木の坂、この上に森鷗外が住んでいたわけですけど、ここに明治の最初、江戸の終わり頃に団子坂菊人形というお祭りができた。染井から巣鴨、谷中根津千駄木、このあたりは沢山の植木屋さんがあったんですね。これは武家屋敷大名屋敷出入りの植木屋ですが、そこが単なる菊を作っているんじゃないので最初は100本咲きとか色が違うのが咲き分けるとかそういうのを作ったのですが、そのうちそれを山に見立てて、富士山とか月見の西行とかそういうのを作った。それから発展して人気役者の顔を人形で作ってそれに小菊を着物を着せつけるというようになって、これが菊人形の始まりなんですね。明治の末まで行われてましたので、その記憶を作ろうとしました。

私たちは笠森お仙のことや団子坂の菊人形、笠森稲荷とはどういうものなのかを調べて、第1号の谷根千を作りました。これが1984年10月15日創刊の日です。1冊100円で、1,000部作りました。けれど、花より団子といいますがお祭りに来て地域雑誌なんて買ってくれ

る人なんかいないんじゃないか。何か食べ物でも飲み物でも振舞おうということになった。近所に料理評論家の友達がいる、菊酒でも作って売ればとか簡単な話からそれがいいという話になりました。不老長寿の菊酒を作ろうというのですが、お酒を仕入れるお金がない。誰かが、そうだ、菊酒だから菊正宗にという話になりました。菊正宗の宣伝部に電話をしたら、お祭りに空のコモ樽を貸すから、これを飾って宣伝してくれたら一升瓶6本だましようということになりました。

そんな風に私たちがいない尽くして事務所もない、電話もない、それは仰木の家のを借りて、名刺を刷ったぐらいの投資で仕事を始めました。それが最初の1,000部はその日のうちに800部以上売ってしまったんですね。菊酒のほうももっと出たんですけど。そのときにつまみを仕入れるお金がないというので、大圓寺の境内のイチョウの銀杏を何日か前にたたき落として、殻をむいて、炒ってだすというとても手間のかかることをしました。当日1人はかぶれてお化けのような顔になっちゃったんですけども。まあそんな苦労をしたこともいまになって思いおこします。

この調子で話していくと、今87号を作っておりまして、一晩かかっても終わらないのでこの辺でやめますね。語りきれないのでちょっとスライドを見ていただきたいと思います。

(以下、スライドを用い説明)

谷中の風景とまちづくり

これは谷中墓地の入り口にある茶屋なんです、明治8年くらいの建物です。江戸の大工が作ったといってもいいと思う。ここにある生活文化は竹箒とか井戸とかいろいろあります。鉄筋コンクリートの団地というものが出てくる。同潤会アパートなどの大正時代から鉄筋コンクリートの集合住宅というものがパイオニアとしてあるわけですが、多くの方はやっぱり戦後まで木造の家に住んで豊の生活をしていた。そこまでは多分連続すると思うんですね。

これは江戸の終わり、元治元年創業のいせ辰という千代紙屋さんです。ここなんか家の前に縁台を出して、毛氈を引いて、誰でも道行く人が腰掛けられるようにということで、町と店の糊代みたいところ、縁側みたいな構造になっていると思うのですが、これもひとつのまちづくりだと思います。まちづくりって体系的に難しく大それたことをやるわけじゃなくて、やっぱり人と人とのコミュニケーションを誘発していく仕掛けを作ることになるんですね。

これは100位あるお寺のひとつで日暮里の養福寺と

いうんですけど、日暮里というのは昔新しく掘ると書いて新堀村と言ったんです。寛永のころにこのお寺は町おこしをやりまして、自分たちのお寺に月見寺、花見寺、雪見寺、と花札みたいですけど、そういう名前をつけて、お花を植えて人をいっぱい集めたんですね。一種の観光開発。ここは養福寺。江戸の名所花暦なんかでは高麗桜で有名だったところですけど。ここの石灯笼もすごく古い江戸の中期、井原西鶴の先生で、談林派というのを残した西山宗因という俳諧の師匠を記念するために作られた灯笼で、奥のほうにお墓、碑もあります。

一つ一つの寺に由緒がありまして、さっきのお寺なんかでもっと言うと、樋口一葉をメジャーにしたといいますか、明治の博文館という大きな出版社がある。その社の墓もあるんですね。いわゆる政治家とか文人とかの墓というのは有名ですが、ご商売していた方の墓とかいろんな意味で由緒あるお墓なんかもあるわけですね。

これは根津神社ですね。先ほど言ったように、四代將軍の弟綱重の屋敷があった。五代將軍綱吉があれだけ生類憐みの令などだして、自分に子が授かるようにして、悪法を作ったのに結局駄目で、このお兄さんの子どもが六代將軍家宣になるわけですね。この土地が空きましたので、將軍様の産土神(ウブスナガミ)が団子坂の上にあったのをここに勧請した。天下普請といって各大名の力を削ぐという目的もあるんですけど、全部で関わらせて造営したという社ですね。で、根津という所は庶民的でごちゃごちゃした商家があって長屋がいっぱいあるところなのに、なぜこんなに立派な神社があるのかというのが私の子どもの頃からの疑問だったのですが、やっぱり歴史を調べてみるとその理由がわかる。

この拝殿とか本殿は重要文化財になっていて、子どもたちがいつも上がって遊んでいる石灯笼も、当時普請までさせられた上にこんな石灯笼まで寄付させられた久世大和守という人の寄進したんですけど、左側の丘は雑木林で、昔は防空壕があったようです。戦後、根津七ヶ町会という町会があるんですけども、競争でつつじの苗を寄進して植えまして、現在では初夏の風物詩としてNHKなんかに出てきまして、観光客を集めてる。こういうのも一種のアイデアでまちづくりの走りだったと思われるんですね。

これは根津神社の中にある文豪憩いの石という、本当かどうかわからないんですけど、鷗外も漱石もしょっちゅうこの根津神社に散歩に来たり句会をやったりし

ている。で、この石も昔からあるから、多分文豪が腰掛けて休んだのじゃないか。まあこの位のことは許されるのじゃないかと思えます。

都市再開発と建造物保存

そういうわけで、雑誌は地域の歴史を掘り起こして定着するというのが一つの目的です。最初は古い方のところに原稿を書いてくださいと随分お願いしたんですけど、今、作文が嫌いな人が多いんですね。小学校の作文教育ですっかり作文が嫌いになっているところで、書き直すと結局、「地域の皆さんいつもお世話になっています」みたいな挨拶になってしまって、「これからも行く末長くよろしくお祈りします」みたいなことしか書かないんですね。また具体性がないものを載せても何の資料にもならないので、こちらからお話を聞きに行き、聞き書きという方法を編み出しまして。やっぱり聞き書きって、こっちが知ってないと聞けないものですね。カニは甲羅に似せて穴を掘ると昔言っていた人がありますが、こちらに知識と引き出しがないと話はずぐつまっちゃって、80年間で一番面白かったことは何ですかみたいな質問しかできないんですね。

これもやっぱり習熟してきますと、だいたい地域の地図から年表、縦軸と横軸みたいなものが自分の中に出来てきて、例えば相槌がうてるようになる。

あその横丁を右に入ったところにある須永さんのおばあちゃんとかいったときに「誰ですか？ どこですか？」と言ったのですが、それだけで相手の方は話す気をなくするんですね。「じゃあ田中さんの前のところのうちですね」とか言えば「ああそうそう」と言って話が進むわけで、大体住宅地図ぐらいのレベルでは住民を知っている。

年表でいうと、私たちは世界史年表とか日本史年表とかいうレベルで歴史を知っている。それは受験勉強で暗記したわけですが、必要なのは、地域年表というものです。私たちの地域ですと、昭和2年の昭和恐慌で取り付け騒ぎの最初に問題になった渡辺銀行があるんですね。渡辺治右衛門が作った銀行です。そのころはちょっと小金があると銀行ができたので、あまったお金を銀行に貯金していたから大きくなった。地域にはそこしか銀行がなかったの、みんなお寺もそこにお金を預けていたんですね。ところがこれが「ただいま渡辺銀行が倒産いたしました」と、倒産してもない銀行を当時の大蔵大臣の片岡直温という人が国会でしゃべっちゃった。本当に倒産してしまい、ここから連鎖倒産が始まって、中小銀行がほとんど倒産するとい

うような取り付け騒ぎが起きる。これなんかはまあ地域の人たち、その頃生きてた人たちはすごく覚えていることですね。だからそういうランドマークというか、みんなが覚えていること、藍染川、団子坂だとか、みんなが覚えている建物、廃屋。そういうものについて色々調べてはお話を聞いて書くということをしてきたわけですね。

そのうちに、記憶だけではなくて、みんなにその問題について話し合ってもらう場、広場が変わりつつあった。例えばちょうどその頃バブルが始まるとどんどん古い建物が壊されていく。どうにかその前に壊されないようにと言って、残したいなという建物をピックアップして載せて、ラブコールというか「この建物を残して欲しいコール」みたいなものを送ってみるとか。その中から私たちも自然に、建物の保存活動に入っていました。

大きなものでは赤レンガの東京駅、上野の奏楽堂という日本最古のコンサートホールですとか、丸ビルですとか色々いやですね。大きな近代建築の保存をやってはいた。同時に地域の普通の民家も残したいなと思うものを、いくつも残しました。でもそれは100位壊れてしまうものの1つか2つ救えたという程度のもではないかと思えます。

ですからカメラマンなど外から来る人たちが、良いとこだとか古いものが残っているとカスコミも騒いでいるけれども、私たちが始めた頃、20年前の谷中や根津を知っている人からみると、ほんと壊れている。小川さんは生まれたときからの半世紀を超える上野谷中をご存知でしょう。私は中学3年くらいから谷中は歩き始めたんですけども、そのくらいのとくと比べても本当にものがなくなってしまって、こんなにもなくなってしまった町にどうして今頃になって人々が良い良いなんて来るんだろう、という疑問、違和感も持っているわけです。

景観という問題でいうと、一棟だけ保存するというのは結構あるのですが、例えば、バブルの頃に幹線沿いはどんどん地上げがされて、大きな人権・居住権に対するひどい被害があったわけですが、この不忍通りという通りにちょうどビルが建ち始めた頃ですね。

東京に23区内だけで19、富士見坂という坂があるんですけども、地べたに立って正面に富士山が見えるのはここだけです。あとはビルの屋上なんかに行くと、後ろの人の富士山を見る権利を侵害して建ったマンションに住む人は見ることができませんけれども、それ

だってその前にもっと高いビルが建てば見えなくなるわけですね。そんないちごっこを繰り返している東京もバブルの頃に、不忍通りのそのあたりにビルが建たないといいなあとずっと心配になってみていたんですけども、なんと伏兵といいますか、1.5km先の方、この通り、高台ですね、本郷通りという幹線道路があって、そこにペンシルマンションが建つことになった。富士山の左側の稜線が隠れるということになりました。

バブルのときにももちろん地上げによって町がどんどんビルになり、地価が上がって、賃貸料も上がって、始め私たちが2DKに8万円で住んでいたんですけど、12万になり15万になり20万になり20何万になり……というような、私たちが住めないという位の値段になっていく中で、住民の追い出しというのがあった。殺人とか放火とか自殺とか発狂とかそういう問題、一家離反、高く土地が売れることによってその分け前をめぐる兄弟の仲が悪くなるとかですね、そんなこと沢山見えてきた。

そのころは保存よりも地域に住民をどう残すかというような活動を、しょっちゅう集会を開いて、この通りをどうしましょうとかね、この町の商店街の明日はどこにあるのだ？ ということを地域でやっていて、雑誌作る以外にも地域であちこち夜まで子どもしょったり抱いたりしながら関わってきたんですけども。

本当はそちらのほうが大事な問題で、私は建物を残すとか景観がきれいだとかは二の次で、まずそこに住む、生業を続けていくという居住権の方がはるかに大事だと思っています。

正面にもビルが建ってしまった。このとき、関係各區、ここは荒川区でその隣は台東区で、旧藍染川を越えると文京区になるんですけど、その区の担当者たちとも協議をして「富士見坂の眺望を守る」という会を作りまして、開発者とも折衝をしたり、空中権を買うとか、また別の土地を買い直してもらおうとかいろんなことを考えました。けれども結局はそのマンションは建ってしまって、左側の稜線は隠れてしまったんですね。まだ右側半分ぐらいは見えるんです。そのとき、遠くの山並みを見る権利っていうのを考えた。ですから近くにある建物を残すということではなくて、バブルでどんどん町が壊れていくときに町の人が言っていた声、「店番をしていて夕日が見えるのがうれしかった」とか「夕日が差すと暖かった」とか。それが今度はビルが建つと夕日が見えない、ビル風が吹く、寒くしょうがない、年配の方は店番しながらテレビも見られない、という風になる。それから富士山を見る権利。

これはやっぱり銭湯に行けば背景画に富士山が多いということからもわかるように、昔は広重を見ても北斎を見ても絵の中に富士山が小さく描き込まれてる。そのくらい江戸というのは富士山の見えるということが精神的なよりどころとなっている。江戸で一番ステイタスが高かったのは日本橋の駿河町、これは北斎が書いた駿河町の絵には正面に大きく富士山が描かれていて、こんなに大きく見えるはずはないんですけど、描いてあるんですね。

その時には日暮里の町会長さんが、80いくつの方ですけれども、私たち敗れて、富士山が見えなくなるときに、彼が言った言葉は、今でも私は忘れられない。「富士山は永遠にあるけれども、ビルはどうせ50年もすればつぶれる」と。「今度改築の時には、そこにビルが建たないように今日からみなさんががんばりましょう」と言ったんですね。多分80いくつの方は次のビルが建つときには居合わせないと思うんですけど、でもそういう風に町の歴史はつながって、自分たちのやったことは次の世代につながっていくという、そういうことを彼はわかっていたと思うんですけど。それはすごく大事なことだと思います。

これは、観音寺というところのねり堀ですね。これは築地堀ってお寺の寺史に書いてあったので、私が『谷中スケッチブック』に書いたら、それからみんな築地堀築地堀って孫引きで書くんですが、こういうのは練堀って言ったほうが江戸では正しいらしいです。これはこの住職のお兄さんと弟が赤穂浪士だったというので、ここで吉良邸討ち入りの密議をこらしたという、観音寺のお寺の土堀ですね。なかなか200年前のきれいな土堀も東京では珍しいわけです。町の中に色々なものを探して、「これは何だろう」と言って調べてみる、そして「これはやっぱり残そうよ」といってみんなに呼びかけるようなことばかりやってた。

こういうものを残すっていうのは日本の場合にはなかったんですね。例えば、国の制度、都道府県の制度、市町村の制度というものができます。国でいいますと、みなさんご存知だと思いますけど、建造物を残すシステムではひとつは「重要文化財」、特に希少なものを「国宝」と言います。例えば興福寺とか唐招提寺とか東大寺とか、南禅寺は最近国宝になりましたけど、そういうのは重文ふくめて2,000棟ちょっとですね。これは今の文化財保護法が明治時代の、古社寺保存法、岡倉天心とかフェノロサとかが、良いことか悪いことかはありませんが法隆寺とかをたずねて救世観音の発見、封印をといて、そういうことをしていくなかで、特

に古社寺という、特に廃仏棄釈によってお寺が相当壊されたり、仏像が破壊された時に、特に古社寺保存法としてできたために、かなり神社と仏閣に偏りがあるんですね。もちろん近代のものなんかはその当時、文化財としては認められませんでした。

私たちが東京駅や奏楽堂の保存をしていたときには、やはり文化庁に行っても、「だってたかが明治でしょ、大正でしょ？」とか言われてたんですね。結論を言いますと、現在は考え方が変わってきて、重要文化財に明治以降のものも入ってきまして、保存が成功して、東京駅は今、重要文化財になった。残るということが決まってから指定されました。奏楽堂も重要文化財に指定されたわけですね。

その後、昭和建築であっても、東京国立博物館も重要文化財、日本橋の三井本館、明治安田生命の本館などは昭和建築ですけども重要文化財になっています。最近では戦後建築も重要文化財になりまして、広島の方の平和祈念堂ですとか、かなり近くまで重要文化財になってきてる。でもまだまだこれではこういうもの（練堀）は残らないんです。

もうひとつは伝統的建造物群保存地区といまして、簡単にいうと町並み保存があるわけですけど、これも全国で73か4位あって、私は趣味で67、8までは自費で訪ねていますけれども、これも様々で、うまく保存や活用が進んでいるところもあれば、ゴーストタウンみたいになっちゃっているところや、観光地化しすぎてるところやありますけど、地域の人たちの合意があって選定するというスタイルでやっています。

それでもないところでどうしたらいいのか。困っていたわけですけど、各市町村がそれぞれ保存や指定している場合もありますが、もっと幅広く身近な文化財をあっさり壊されないようにしていくために、市民運動の高まりもあってできた制度というのがありまして、1996年にできた登録文化財という制度です。英語でいうとレジスターというんですけど、下からみんなでボトムアップで気になるものを登録していこうということで始まってまして、これ（練堀）は国の登録文化財ですね。登録文化財は指定文化財にくらべて遥かに手当てはない。でも今は税制上の問題もクリアして、相続税とか固定資産税とか、持っている人に負担がかからないで残せば、メリットがあるようになってきています。これは歓迎されたと思うんですけど、いままで10年もしないうちに全国で600棟ほどできてきてます。担当者によっては登録文化財制度を知らない文化財担当者もまだ日本に結構いてですね、県によって市によって、

担当者の姿勢で全く数が違うんです。沖縄なんかはつい最近まで2棟しか登録されてなかった。あれだけ赤瓦の古い家があるにも関わらずなんです。東京は結構多いんです。しかも私たちの地域、文京区だけでも30棟近くあるし、台東区も結構あります。みなさんのそばでも「ぜひ残したいなあ」とか持ち主の人さえ同意してくれたらみんなで活用したいとか、そういうものがありましたら、50年以上経っているものなら基本的に登録できるんですね。ですから市役所などの協力を得て、文化庁の方に申請したら登録プレートがもらえて、メリットがある。みんながこれは国民にとっての貴重な財産ですということが認識されるようになっていきます。

これは、谷中にあった二千何百坪の緑地、もとはもっと広がったんですけど、江戸時代の旗本屋敷。これの中にいるまでこんなものがあるなんて信じられなくて、近所と付き合いのないお宅だったので、どうやって入れるかなと思って、雑誌の回収に紛れ込んで、町会の人たちと一緒にやって。その次は、夏になると環境問題的にはあんまり良くないんですけどスミチオン、白い粉を撒くんですね。谷中はやな蚊と書くほど蚊がいっぱいいるところなので、これの消毒隊にくっついて入って、初めて当主と直談判して話を聞くことができたんですけども、相当大身の旗本の隠居所だったみたいで、こんな広い緑地が残っていました。

ここはこのあとスポーツクラブになってしまうんですけど、その時も家を壊すにあたって、私たちの仲間が、『谷根千』の雑誌の本体の活動とは別に、町の方たちと一緒に私たちも一員となって「上野谷根千研究会」というのを作った。と言うのもどどん調べていくうちに、やっぱりこれ費用がかかるんですね。それを全部編集費で賄うわけには行かないので、みんなで谷中、上野桜木、その辺の古いものを守りたいと考えた人たち、またまちづくりをしようという方たちと一緒に、トヨタ財団に、当時、「身近な環境を考えるコンクール」というのがありまして、勝ち抜き戦でいいのを出すと次に勝ち進めるというので私たち最終までいったんですけども、グランプリはとれなかった。これグランプリをとると2,000万円もらえたんですけども、私たちは優秀賞で100万円いただきまして、この先谷中学校という地域を育てる事務所をキープするために全部使われた。

今でいうNPO法案が通る前のことなんで、あとで谷中でNPOもできていくことになる。私たちの仲間で行って、文書を読むとか、古いものを整理するとか、古い衣類を整理するとか、色んなことをやりまして。あ

とこのどてばらにもものすごい大きい防空壕を発見した。キリスト教徒のカタコンベじゃないかなというほど大きな地下礼拝堂のようなところ。まだあります。

開発というのは恐ろしいもので、さんざん環境を攪乱してスポーツクラブになったのに、10年程で経営不振で閉鎖になって、住宅公団のマンションを建築するプランもあったんですが、二転三転して今は区の緑地になっています。今これをどういう風に使うかということで、地域の市民と行政でともに考えているところです。

これはS字坂という、名前の由来とか言い出すと大変ですけど、正面に見えるこの家は残念ながらこの前壊されました。これは内田百閒という作家が明治の頃住んでいた家なんですね。

谷根千の生活と環境保全

こういう路地に咲いている細部にその人たちの住まいへの想いというものが現れていると思います。

庭を持ってないんですけども、家の入る玄関の片隅に好きなものを置いて、趣味が良いか悪いかは別として、自分なりの空間を作ろうとしている家。

これは総持院というお寺ですけど、ここに縁日があると、信者さんが来て、観音経を読んでですね、ここは目に霊驗灼(あらた)かで、目の悪い人が祈祷すると目が良くなる。こういうのいっぱいあって、虫封じの寺とか韋駄天の寺とか。ボケ封じの寺とか、頭が良くなって入学試験に合格する寺とかね。ご利益もののお寺があって、まあそういうのを歩いて回るコースなんかも、雑誌で紹介したことがあります。

これは手焼き煎餅で、ご夫婦で手作りでやってる大黒屋というお煎餅屋さんです。器具も非常に昔ながらのものを使っていて。こういうお店が沢山あります。

これは谷中ぎんざの漬物屋さんですけど、やっぱりここでも昔ながらというか、自分のところで漬けて、値段書いて、籠の中におつりが入ってて。裸電球1個ぶらさげてやってるような昔ながらのお店。こういうのもひとつの生活文化。こうショウウィンドウの並べ方とか、ものの売り方、呼び込みの声、それも生活文化だと思いますね。

これは井戸。不忍池に地下駐車場ができる時に単体としての不忍池を守るということではなくて、そこに注いでいる旧藍染川流域の地下水の道、そのようなものも想像して、自分たちも大事にしていかなければならないんじゃないか。戦後、蛇口をひねれば水が出るということから、その向こうに何があるのか。私たちの飲んでる水のおかげで地方の山林が壊されたり、ダ

ムで破壊されてるんじゃないか、という想像力を持つということ、井戸水の調査を始めたんですね。ちょうどこの時、東京都の職員の方たちで、ソーラーシステム研究会の村瀬誠さんたちのグループに出会って、市民でもできる簡単な井戸水の調査キットというものを開発しまして、一緒に回って歩いて、これも環境教育ですけど、子どもたちと一緒に井戸の深さとか、水温とかpHとか、有機溶剤が入ってるのかとか大腸菌類はいるのかとか、そういうものを調べて歩いていました。

その前に井戸特集ってやったことあったんですけど、レトロな井戸を探して、「わー、ここにもまだ井戸がある」みたいな、アドマチック天国的なノリでやったものですから、あまり持ち主と関係ができなかったのですが。この時は防災上、やはり昭和30年代の小河内ダムが干上がって水がなかった夏も、地域では井戸を中心とした暮らしがあった。何かの時に水道が止まっても井戸水が使える関係、井戸のポンプは個人のもので、中の水はみんなのもので、そういうのを使える環境を作っていきたい。井戸の持ち主と大変仲良くなって、調査にも非常に協力的で。ただで水質が全部わかるので歓迎されました。お寺の深井戸なんかでは本当に良い水質の井戸があって、私たちも随分飲んでたりしたんですけど。ただこれ「この水は飲まないでください」って保健所は書いておくんですね。責任逃れというか、水道法を適用している井戸はないわけで、井戸水を判断する法律はないわけですから、こうやって書いておくですね。

これは井戸水の調査キットを自分たち作ったので、子どもたちと一緒にお寺の深井戸かなんか調査しているところですね。

さまざまな建造物とその保存のあり方

これも登録文化財になっておりますけど、明治時代に建った根津教会。瓦屋根の不思議な洋館風の建物ですね。この周りキリスト教会がすごく多いですね。

これは都千家を壊すというので家に行ったときに、すごく立派なステンドグラスを見つけて、詳しい友人がこれは小川三知さんの作品ではないかと言ったら本当にサンチというサインが入っていたんです。慶応義塾大学の図書館のステンドグラスなんか作った人で、日本のステンドグラス作家の草分け。安中教会とか起雲閣とか作品は方々にある。これはもったいないので是非保存してくださいと言って、部材の保存ということで、新しく作る家に使いますという風になりました。ですから、もし壊してしまう場合でも、間取りをとり、

写真を撮ったり、お話を聞いてどんな家があったのかということ記録するようにしてますし、できたら部材だけでも救って使ってもらおうようにしています。

これも花重という登録文化財になっています。明治3年、出桁造りの商家建築ですね。2階が低いんですけど。これも江戸の大工の仕事だと言えると。谷中墓地の入り口にあるところです。

これは岡倉天心の日本美術院が開いた発祥の地に建ってて、これは法隆寺を模したものですけれど、中に平櫛田中の造った岡倉天心像があります。

これは路地というか横丁。根津の小さなところですよ。みんな表立って自分の意見を言ったり、大それたことやってるような人たちはいないかもしれないけれど、自分のお庭が持てないにしてもこういう風に緑を植えて、育てて楽しもうという気持ちを持って人が沢山いて、緑被率って上から見ると0にカウントされちゃうんですが、目で見て目に入る緑の量ってなかなか多い。緑視率って言葉を私作ったんですけども。家の人たちの感情、趣味というものが表出してくるような景観を構成していると思います。あと質屋さんが繁盛しているんですね。年金の受取日なんか取材に行くと、「忙しいから後にして」というくらい混んでるんですね。

これも出桁の古い長屋ですね。だいたい日本中の町並みの壊される原因はモータリゼーションなんですよ。道に沿って家がへばりついているところに、車が入れないということで、壊してセットバックして前に車庫をつけるということでだいたいこぼこで前には車が並んだような町並みが全国にあります。

保存しても重要文化財が公園の片隅にあって、誰も管理してないで、ただ修復されているというようなケースが多いんですが。特に身近な文化財については、みんな使っていくということが大事だと思うし、愛情をかけていくことによって、建物は輝いていくと思うんです。文化元年に創業した東京で1番古いといわれている銭湯が廃業して壊すというときに、存続させて、ギャラリーにした人がいるんですね。大変広い空間で、素晴らしい作品も飾ってるんですけど、入口の玄関では銭湯の下足箱をもとのかたちそのままにして使っているんですよ。

これは根津遊郭。根津に明治21年まであった遊郭の最後の名残の建物で相当修復・改築されていますけども、北御堂という入口が残っています。唯一の遊郭の遺構ですね。

これは藍染川の流れに沿った場所にあった、川を利用していた染物屋さん。明治28年位の創業です。

若い人たち、私たちと一緒に上野谷根千研究会をやっていた人たち、多くは大学生だったんですけども、卒業しても、だいたい卒業したらいなくなってしまおうという人が多い中、なぜか芸大の学生たちはそのまま町に居続けて、結婚して子どもができて。授業で来た椎原晶子さんなんかも、私たちハタチの頃から知っていますが、その後20何年、彼女が40過ぎて私が50を過ぎてもまだ一緒にやっている。彼ら若い人たちが町中を展覧会の会場にしようと、箱物の美術館は必要ない、町中を使って美術展をやろうというので、ブロック塀を利用して写真展をやるとか、人の家の縁側にインスタレーション作っちゃうとか。あとは職人さんやアーティストの家、ギャラリーを開放してみんなが入れるようにするとか、そういうのをつなげて、100企画以上を、毎年谷中芸工展としてやっていまして、これはその会場のひとつで、子どもと一緒にワークショップやってるところですね。

これは富士自転車（看板）。縦に並べられないので2つに分かれてしまっていると。なんとも涙ぐましくて、こういうのが私は大好きなんです。

もう家の中に洗濯機を置く場所がないというのが歴然としています。

これはマンション建設反対運動の資料ですね。これは、谷中のお寺とお寺の間に9階建てのライオンズマンションが建つことになって、それを知った谷中学校の人たちはビポットバルーンというのを上げました。奥行き・高さ・幅、この位のものができますよということ、バルーンで示しました。それで四角い建物がイメージできて、「ここにこんな高い建物ができちゃまずい」ということで、すぐに住民大会を開きまして、交渉の結果、なんと、9階建てから4階建てになりました。これは大変な成果、その後国立のマンション問題なんかでも必ず例で引かれる。後ろのほうは6階建てでマンションは建ってしまいましたが、色や形状、材質を業者のほうと相談しましてなかなか良いマンションにすることができた。これはたまたまうまく行った例で。こちらのほうは上野桜木町のマンションの反対運動ですが、業者が言うこと聞かずにそのまま建ててしまいました。

これは3階建ての根津のはん亭という串焼き屋さんで、国の登録文化財です。

これは茨城県の宿泊所です。悔しいことに保存に失敗した例なんですね。明治時代に田嶋浅次郎という仕事師がいて、贅を凝らして作った家だったんですけども、それを茨城県が買って、県庁の職員が東京に来るときとかの宿舎にしていた。知事さんは気に入って

いて残すつもりでいたんですけれども、やはり財政的に困難で維持ができないということで壊すという話があった。私たちのほうは「これは壊さないで欲しい」と。買取はできないから、保存を前提としたコンペをしたらどうでしょうと、茨城県まで行って提案しまして、それはできることになりました。ただ、はっきり言えばデキレース。県庁の職員や課長しか審査員がいなかった。ある茨城のお金持ちの方がここで幼稚園を経営し、保存する案を私達は支持していたわけですが、実は簡単にある某工務店が老人ホームを経営するという案のほうに勝ってしまった。それは茨城県と文京区役所と地元の町会と田舎議員のせいです。はっきり言って。それで根回しをしたらしくて、老人ホームができたなら優先的に町会のみなさんをいれますとか、町会の人ややっている八百屋さんや肉屋さんで買いますとか、いろんなことがあったらしくて。隈研吾さんがこの設計をやったんですけど、ほとんど残されなかったですね。蔵が一軒、うどん屋みたいのになったのですが、あけてみるとほとんど結局シロアリが食っていてだめだったといいわけをいった。

うちのスタッフとか、茨城県のほうに何度も足を運んだ椎原さんたちとか活動家の人たちはその労力が無駄になってしまった。さらに腹が立ったことは、どうもこの老人ホームを業者が売り逃げしたんですね。だから私もみなさんもうまい話とかいい話を信用してはやっぱり町の環境は壊れるばかりなので、あまり物わかりはよくなり、おかしいと思ったことは徹底的に追及した方がいいと思います。

私たちという運動は連戦連勝だったという印象があるかも知れませんが、実は手痛い失敗もたくさんしています。サトウハチロー記念館も結局壊されて。サトウハチローさんが本当に住んだそのものも壊されて記念館が岩手のほうに行っちゃった。

行政で驚くべきことは、正当性のある・もとの本物を壊してよくも偽者を作るのかと思いますね。例えば今、三菱地所が古河ビルのところを壊したあとにかつての三菱一号館を復元するといっていますが、それならなぜ本当にコンドルが作った三菱一号館を壊してしまったのでしょうか。それを壊さないでおけば良いものを、時代の変化もあります、まわりを全部超高層にしておきながら三菱一号館だけを復元するというところに私は納得がいけないので、委員会に入ってくれと言われましたが断りました。

長崎県の対馬に行って、樋口一葉が慕っていた半井桃水、彼はあまり有名じゃないですけど、なかなかす

ごいジャーナリストです。この人の家があるということで喜んで行って、帰った翌年に連絡があって、半井桃水の生家を壊したあとに記念館を作ったのでぜひ何か書いてくださいと言われて、びっくりしまして。なんで生家を壊して記念館を作るのか、こういうことは河合継之助の家を壊して、河合継之助記念館をコンクリで建てるとか。こんなことばかりがまかり通ってきた今まではなかったかと思うので、やはり本物があるということがすごく大事だと思います。

お話はこれでおしまいにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(会場、拍手)

<質疑応答>

質問者A：杉並の水みち調査会に所属していますシゲヒサと申します。井戸水の調査のことでお聞きしたいのですが。今のスライドにあったポンプ井戸でどうやって水質検査なんかをやったのかということ。それと、深井戸と言ってらっしゃいましたが、どのくらい深さの井戸を深井戸というのか、教えてください。

森氏：正直言って、井戸の調査については私がやってしたのは、不忍池の問題に取り組んでいた頃の2、3年のみなので。今はあんまり覚えていないんですけど、18m～20m位の井戸を深井戸とさせていただきました。

井戸は、使われていないものを含めると みんなで探し回って260位あったんですね。でも結構使われているほうだと思って。お寺さんとか境内の掃除とか水遣りとかお墓洗うのとかに使っていますし、自分のところで井戸を持っていて、生活用水を全部井戸で賄っているという人もいました。それからオンザロックを作った飲んでいとかわかって使っているとかいろんな方がありました。私の中で印象的な話で、「毎日変化するからよく色や濁りを確かめて使うんだ」という方。確かに台風の後濁るとかですね、自分で確かめて、自分の力でできることは大事で、自然を感じ取る力が弱くなっているなあと感じました。

質問者A：あのポンプ井戸では、水質水温CODの調査はできないんですよね。そこらへんの井戸をどういう風にお探しになったのか知りたいんですけども」

森氏：もちろんつるべの井戸みたいなものもありましたけども。私自然科学のほうは弱いので……。

小川：一緒に調査をやりました小川と申します。ポンプ井戸はおっしゃる通りやっぱり調査ができないんです。でも中には、井戸ポンプの固めてあるねもとに板があってそれがはずせるのがあって、そこから機器や

採水器を降ろして調査したり。またそっくり開いている井戸はそのまま調べました。さっき18m位と言いましたが、もうちょっと深いところまで。高台の場合はだいたい地下水位が20m位あるのです。それから1番浅いのは藍染川のところで足の下約20cm位で、かなりいろんなものがありました。

質問者B: 東京学芸大学学部3年のスギウラと申します。地域紙について最初のほうのお話で、谷根千を作った当初、20年位前とおっしゃっていたんですけども、そのころと現在とを比べて、地域のことを大切にする考え方だとか一般的な地域の人びとの考え方も変わってきたのかなと思うのですが、地域外にいて、地域にずっと長い間住んでいない、でも地域の良さを伝えたいというような試みをした場合に、現在においても配布した資料を置いていただくとか地域の方にご理解を得るといことは、20年を経た今でも難しいのではありませんか。

森氏: まず谷根千という地名みたいなものが1人歩きしてしまったとかブランド化してしまって、「自分たちはいいところに住んでいるらしい」「歴史のある珍しい地域だ」そういうことがすごく認識された。一時期バブルのころ大規模開発が東京中で起こっていたときに、この地域でも行われそうでしたけど、この地域はそういう地域ではないと。少しずつ修復しながら古いものを残していかなきゃいけないところなんだ、という位には行政も住民も理解をしていきました。

ただ、地域の中には私たちのやっていることに反対したり、うっとうしいと思っている人もいた。当然です。千駄木のお屋敷町に住んでるのに、根津の長屋の人と一緒にされたくないとかね。差別心があると思うんですけど、財産価値が下がるとまでいう人もいますね。私たちは300位のお店の人たちに雑誌を毎回運ぶことによってコミュニケーションを作り、そういう人たちは私たちのことを支援してくださっているし。これ部数は1,000部から初めて、だんだん増えて12,000部までいったのですが、今は7,000部位。でも7,000部売れている雑誌って今はあまりないので大事にしているんですけど。私たち自身の体力や気力が続かないというのもありまして、おそらくあと何年かで終わりにしようかなと思うのですが。反対にその頃だったからこそこういう紙のメディアを作って、これは蓄積するメディアとして、非常にハンディで読みやすいという点では良いと思います。でももしこれだけインターネットが普及した現在だったら、こういう紙のメディアを作ったかどうか分からない。今だったらホームページを立ち上げた

かもしれない。今は全国で市民が自分の町のホームページを作ってコミュニケーションツールとしている例もありますので、私たちも谷根千ってホームページを開いてますが、これにはこれで速報性がある。こっちは3ヶ月に一度しか出せないの、バーゲンセールとか。ホームページだったら「今日須藤公園の池にカルガモが来ています」とか「蟬が羽化しています」とか伝えることができる。そういう速報性があることはホームページ。そうするとかなり利用者が違うなと思います。

私たちの雑誌を初期の頃応援してくれていたのは歴史や文学や町歩きに関心のある、コアな方が多かったんですけども、やがて谷根千が一人歩きしだして、散歩の達人やHanakoなどの簡単なメディアに特集されるようになって。そういうほうが手軽だし、おいしいものを食べて、どこか1ヶ所博物館か美術館を見て、ちょっとお土産を買ってという、なんていうか大衆的なもので満足するような方たちが増えてきて、そういう方たちは別に深い歴史を手繰り寄せて深く知ろうなんてしないので、それで読者が減ってきたのではないのかなと思います。

地域のほうは私たちが始めましたので、若い人たちがずいぶんやりやすくなったと思います。どんどん芝居だの美術だの建築だのの分野で活動する若い人たちが増えて。これは私たちにとってもとてもうれしかったことで。私たちの子どもたちも地域活動に参加していますし。2代目みたいな人たちが育っているし、お店の若主人たちがまた別のことをやっていますね。

<講師プロフィール>

森 まゆみ (もりまゆみ)

東京国際大学 国際関係学部 教授、作家

1954年、東京都文京区動坂生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。出版社で企画・編集の仕事にたずさわった後フリーとなり、1984年に地域雑誌「谷中・根津・千駄木」(通称「谷根千」)を友人とともに発行。同雑誌の編集を続けながら、地域研究、紀行、文学などに関する著作を発表する。

著書に『「即興詩人」のイタリア』(講談社、第12回JTB紀行文学大賞)、『鷗外の坂』(新潮文庫、平成9年度芸術選奨文部大臣新人賞)「かしこ一葉」(筑摩書房)、「小さな雑誌で町づくり」(晶文社)など。サントリー地域文化賞、日本建築学会文化賞受賞。文化庁文化審議会委員。